

～糖尿病患者3,437人に対する調査を塩野義製薬株式会社と共同実施～

## 糖尿病患者の2人に1人は、治療にきっちり取り組めていない！？ いま、見直される糖尿病患者の治療へのケアとは

- ・糖尿病患者で「治療に必要なことはきっちりやっている」は51.4%にとどまる
  - ・治療に前向きに取り組むために重要な要素を、多変量解析などデータ分析により検証
- 治療への取り組みにおいては、患者本人の意識に加えて、医師や家族など周囲との関係性も影響あり

### 概要

昨年末に発表された厚生労働省による調査結果によると、「糖尿病を強く疑われる者」と「糖尿病の可能性を否定できない者」を合わせると2,050万人に達したとされており、いまや糖尿病は国民病ともいわれています。

また、糖尿病は完治が大変困難な疾患であり、患者のQOLの維持と寿命の確保を目的として、さまざまな面からのケアや対策が急務とされています。

そこで、メディカルライフ研究所では、2013年10月に、糖尿病患者の意識と行動の実態を把握することを目的に、塩野義製薬株式会社（本社：大阪市中心部）と共同で、糖尿病患者3,437名を対象とした意識調査を行いました。

調査結果からは、糖尿病患者の大半が、治療継続の重要性を認識しているにもかかわらず、きちんと治療を続けている方は半数に満たないという実態が浮かび上がりました。

では、治療に前向きに取り組んでもらうためには、どうすればよいのでしょうか。

前向きに治療に取り組むという意識を患者の目標とし、その目標に対して影響を与える要素を、定量的なデータ分析により検証してみたところ、以下の8つのポイントとの関連性があることがわかってきました。

患者本人の治療への評価：『1,治療効果の認識・理解』『2,治療の精神的負担』  
患者本人の糖尿病、治療に関する知識：『3,自分の病状の理解』『4,糖尿病の薬や治療方法の知識』  
医師との関係：『5,医師の理解・支え』『6,医師に注意される＆うるさい』  
家族との関係：『7,家族との精神的なつながり』『8,家族の行動的サポート』

\*調査設計・分析について：メディカルライフ研究所の調査研究パートナーである（株）応用社会心理学研究所が、これまで行ってきた病気関連行動に関する研究より明らかになった受療行動に関する設問項目及び、糖尿病医師へのヒアリングを参考に調査設計を行った

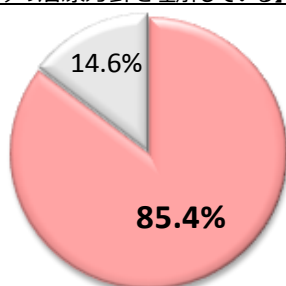
### 結果ポイント

#### ①糖尿病患者の治療への意識

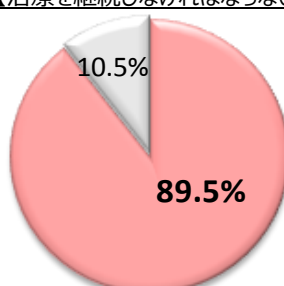
##### 患者の8割は治療方針を理解しており、治療継続の重要性も認識

糖尿病患者において、「今の治療方針を理解している」人は85.4%にのぼり、大半の患者は、自分がどのような治療を行っているかを理解しています。また、糖尿病は完治が大変困難であり、患者は一生治療を続けていくことになりますが、その治療の継続の重要性についても、89.5%が認識をしています。

【今の治療方針を理解している】



【治療を継続しなければならない】

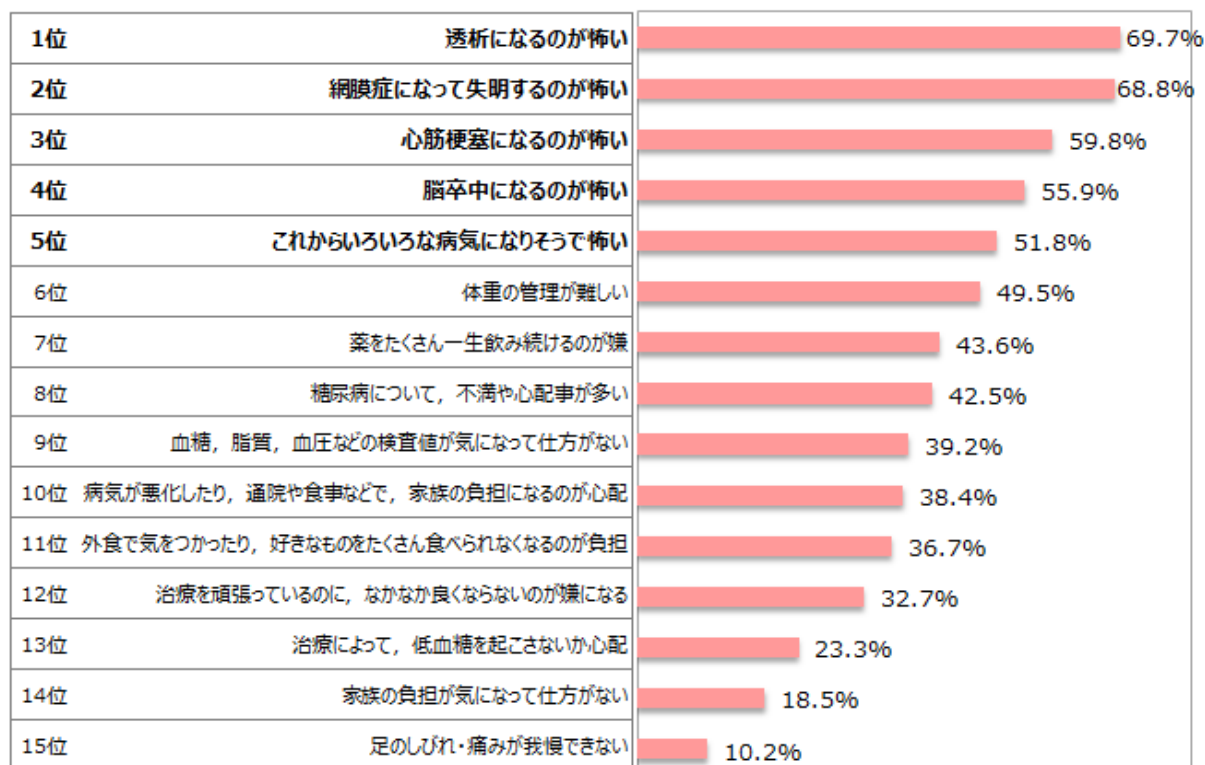


■『そう思う・ややそう思う』  
□『どちらともいえない・あまりそう思わない・そう思わない』

## ②糖尿病患者の心配事や不満

### 患者の心配事は、合併症、検査値のこと、家族への負担など、多岐にわたる

糖尿病患者の心配事において、「透析になるのが怖い」「網膜症になって失明するのが怖い」「心筋梗塞になるのが怖い」など、合併症への不安が上位にあげられました。また、6位以下には体重管理のこと、薬を飲むこと、検査値のこと、家族への負担などが続き、いずれも3～4割ほどみられています。

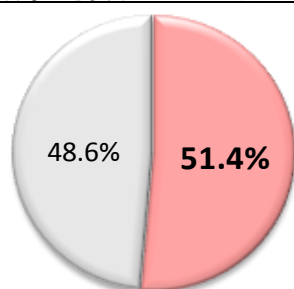


## ③糖尿病患者の治療への態度

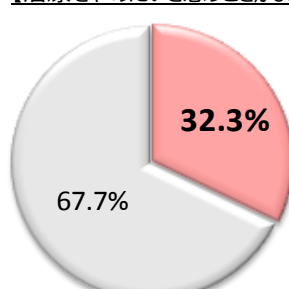
### “治療をきっちりやっている”人は半数程度、“治療をやめたいと思うことがある”人も3割存在する

大半の患者が治療方針を理解し、また治療継続の重要性も認識してはいるものの、「治療に必要なことはきっちりやっている」人は51.4%と半数程度に留まっています。また、糖尿病患者は、様々な心配やストレスを多くかかえていることもあるためか、「治療をやめたいと思うことがよくある」人が32.3%とほぼ3人に1人の割合で存在しています。

【治療に必要なことはきっちりやっている】



【治療をやめたいと思うことがよくある】



■『そう思う・ややそう思う』  
□『どちらともいえない・あまりそう思わない・そう思わない』

#### ④治療に前向きになってもらうためのポイント

##### 治療への取り組みには、患者本人の意識だけでなく、医師、家族との関係性も重要

治療の継続が重要であることはわかっている、ちゃんと治療に取り組むことがなかなか難しい糖尿病ですが、ではどうすれば糖尿病患者は、前向きな気持ちで治療に取り組めるのでしょうか。

「治療に前向きに取り組む・治療をきっちり行う」という気持ちには、どのようなことがらが影響を与えるのかを検証したところ、今回の調査では、

- －「治療の効果を感じる」や「治療にストレスを感じる」といった、患者本人の『治療への評価』
- －「糖尿病自体や治療に関して理解しているか・知っているか」といった、患者本人の『治療・病気に関する知識』
- －「医師が自分（患者）を理解してくれているか、注意されたりするのがストレスでないか」といった、『医師との関係』
- －「家族が自分（患者）を気にかけてくれているか、治療に協力してくれているか」といった、『家族との関係』

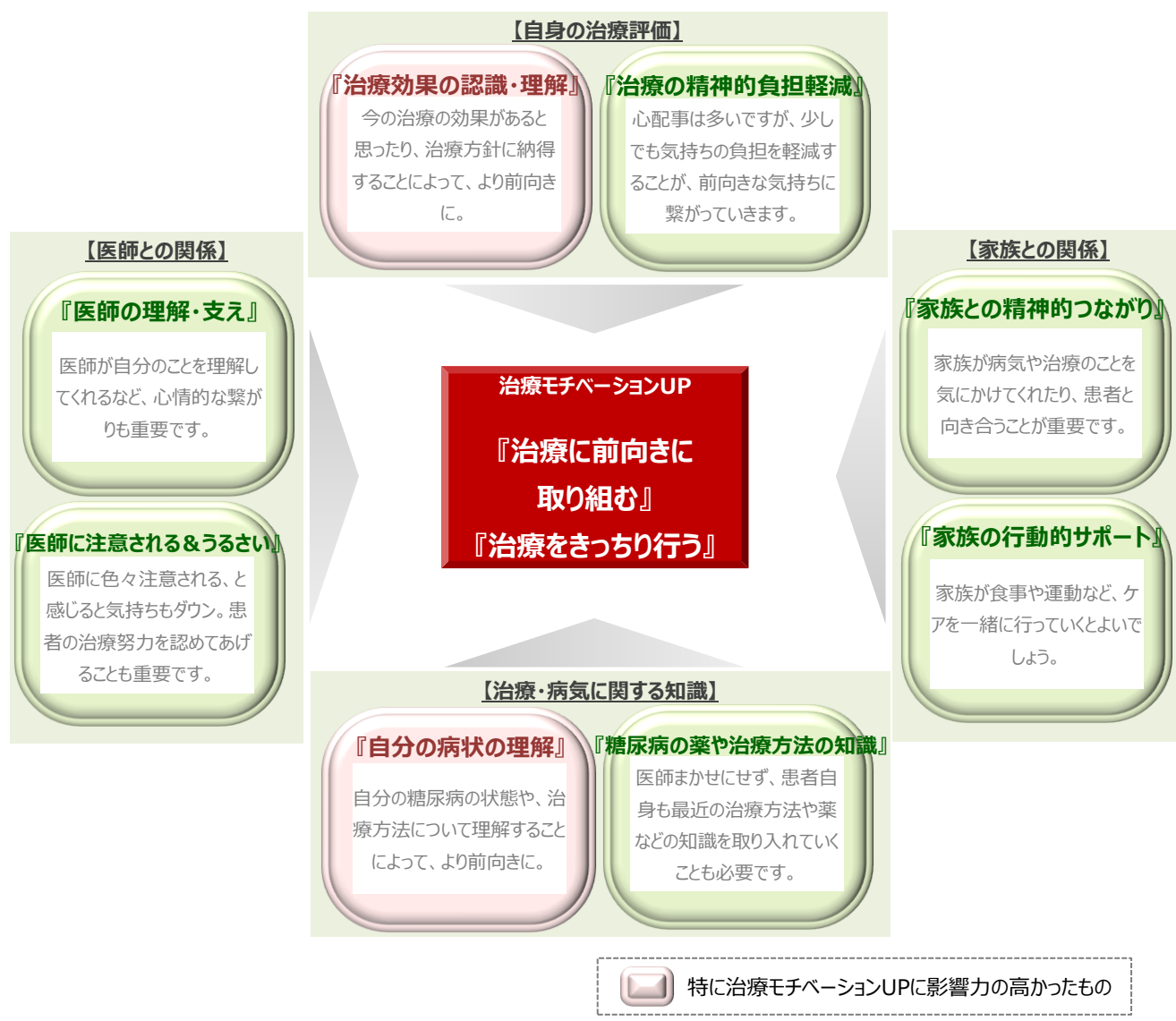
といったことがらが影響力があることがわかってきました。

中でも、影響力が高かったのは「治療効果の認識・理解」と、「自分の病状理解」の2つでした。

なお、患者自身が疾患に対して持つ意識や知識に加えて、医師や家族といった周囲の方との関係も重要なようです。

（各項目詳細は以下図の通り）

##### <治療モチベーションUPの構造 イメージ図>



## 治療現場での活用

今回のレポートでは、糖尿病患者全体の意識と態度の把握を行いました。実際には、治療に前向きな人/そうでない人、医師との関係が良い人/良くない人、など様々なタイプの方がいらっしゃいます。

今後は、そのようなタイプの特性を踏まえ、各タイプ毎に『糖尿病治療に取り組んでもらうためのポイント』を整理していくことによって、糖尿病患者のよりよい治療への取り組みをさらに考察していくことも必要と思われます。

※本調査結果については、塩野義製薬株式会社のホームページにおいても掲載しておりますので、ご覧ください。

塩野義製薬株式会社ホームページ <http://www.shionogi.co.jp>

## メディカルライフ研究所の見解とまとめ

今回のレポートにあるように、糖尿病患者の心配事は、合併症のこと、体重管理のこと、薬のこと、家族への負担など、多岐にわたります。かつては、糖尿病治療というと、血糖値の管理だけが取り上げられることも多かったですが、これらの幅広い問題に対処し、普段の生活の質（QOL）を維持していくためには、血糖値の管理だけでなく、合併症など周辺領域の疾患についても医師と患者で情報共有していくことが必要と思われます。また、治療においては患者本人だけのこととせず、家族など周囲の方も患者への理解、及び糖尿病という疾患への理解を深め、一緒になって治療に協力していくことも重要といえそうです。

## 調査概要

- 調査手法 インターネット調査
  - 調査時期 2013年10月
  - 調査地域 全国
  - 調査対象 20歳～69歳 男女
  - 調査サンプル 有効回収数(糖尿病患者\*) 3,437s
- \*糖尿病疾患：糖尿病に「あてはまる/ややあてはまる」と回答し、かつ「医師の診断によって糖尿病と特定した」と回答した人

### ■ 調査質問項目

- |                |                              |
|----------------|------------------------------|
| ・糖尿病治療への認識     | ・糖尿病治療における薬の評価               |
| ・糖尿病治療への態度     | ・糖尿病治療における医師との関係評価           |
| ・糖尿病、治療に関する知識  | ・糖尿病治療における家族との関係評価           |
| ・糖尿病治療への心配事・不満 | ・糖尿病治療において関わりのあるメディカルスタッフ など |

## メディカルライフ研究所 Research Report 研究パートナー

メディカルライフ研究所での調査・研究においては、『病気関連行動（illness behavior）』について多くの研究知見を保有するシンクタンク「(株) 応用社会心理学研究所（アスペクト）」とパートナーシップを結び、協業して実施しています。

\* 研究パートナー：株式会社 応用社会心理学研究所

基本商標 アスペクト (institute of Applied Social Psychology + connect)

代表者：廣田 君美

URL: <http://www.aspect-net.co.jp>